金閣炎上

水上勉

新潮文庫

金閣炎上

新潮文庫　　み－7－19

昭和六十一年二月十五日　印刷
昭和六十一年二月二十五日　発行

著者　水上勉

発行者　佐藤亨

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　二一一－一一
東京都新宿区矢
電話　業務部（〇三）二二六一一一
編集部（〇三）二二六四四〇
振替東京四－八番

定価はカバーに表示します。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊥　印刷・大日本印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
©　Tsutomu Minakami　1979　　d in Japan

ISBN4-10-114119-3　C0193

新潮文庫

金閣炎上

水上勉著

新潮社版

金閣炎上

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

青葉山の中腹にあった私の分教場から岬へゆくのに、尾根づたいの杣道しかなかった。私はよく児童をつれて岬の端が見える杉山峠まで散歩した。岬のけしきは濃紺で描かれた絵のようで、子供らは鹿が寝ているようだと云った。なるほど、うずくまったけものだ。切りった尾根はその背筋だし、ふたつの離れ島に向って、もりあがってゆく端の高みは、角を失った頭か顔にちがいなかった。

闊葉樹の多い山はぬれた皮のように陽のあたる所もあたらない所も光っていた。無数の襞は海へ落ちる谷であった。海はえぐれた江にも、岩場にも、波がしらをはじかせていた。

子供らはこの峠で足どめを喰うと、岬の端までゆきたいとせがんだ。低学年でもあったし、本校長からの指示もあって、峠から北へゆくことは禁じられていた。当時はこの半島全体は、舞鶴軍港を抱く要塞地帯だった。しょっちゅう監視員が見廻りにきた。司令部からの刷り物には、子供に山や森を写生させたり、地誌のまねごとすらも書かせてならないとあった。最上級の四年生のため、私は教室のうしろ壁に、掛軸型の「大日本帝国精図」をかけていたが、その地図にも分教場の所在する高野区の山や川は誌されていず、岬の名である成生ももちろんなかった。

私が在地の名を冠して高野分教場とよばれたこの学校にいたのは、昭和十九年春から二十年の秋までだった。もう太平洋戦争も、敗色こい噂が山間地の隅にもながれていたが、その敗戦から、三十年経った今日でも、貧寒地開発救済が理想で、当選した革新府政の蜷川虎三行政下においても、岬の成生部落へゆく車道はないのだった。手前の田井浜で道は跡切れ、あとは昔の人が手鍬で掘りきざんだ洞道や古道があるにすぎなかった。

私は今日まで何どこの岬を訪ねたろう。春秋はもちろんだが、夏も冬も、表情をかえる入江のけしきを見にいった。一つは私の生家が、岬とむきあった内陸側の海岸にあったためで、在校時代、授業を終えて帰ってゆく道も、杉山峠から岬を背に南へ降りるのだった。気がむいたら少しでも北へゆき、岬の端まではゆかなくとも、途中の宮尾、日引などの磯にへばりついた部落へ降りて、そこからやや近くなった成生を望見して帰った。尾根道はわりになだらかだった。人通りは少なくて、私一人だけの日が多かった。二十年はじめごろ、山のなかを下士官に引率されてゆく水兵や、徴用隊員とわかる集団とよくすれちがった。兵隊や工員は、年輩者が多く、誰もが生気のない顔で歩いていた。三、四日してそのあたりへ行ってみると、赤土の新道が出来て、奥には家一戸が入りそうなほどの大穴があけられ、口に板戸が立ち、岩乗な鍵がかかっていた。村びとのはなしだと、穴は海軍の秘密倉庫で、爆弾が保管されているということだった。いまにアメリカの飛行機がやってきて、山にも爆弾を落すだろう。とすれば、山は火薬の倉といってよいほどだから、一発でそこらじゅうがはじけとぶ、などという物騒なはなしを、話半分にききながら、臆病者の私は、不安八分、好奇心二分で、

兵隊の去った道をひとりで歩いた。

火薬の山でも、春がくればわらびやぜんまいが、どこのよりも背だかく芽ぶいた。夏は蕗、葛がむらがって本校へ供出するのに便利な収穫場になった。秋はかぞえきれぬほど茸が出た。とりわけ冬はじめの山芋掘りは忙しく、楽しかった。芋の古つるを追っているうち道に迷い、明りをつたって森を出ると眼の下が断崖だった。そんな時でさえ、成生岬は、私たちに向って頑固に面をあげず、黙ったまま海へ顔をつっこんで、眠りこけた鹿だった。

2

昭和十九年の八月はじめである。確かな日はわすれたが、陽のかけらがそこらじゅうにつきささる暑い午すぎだった。杉山峠から北へ少し行った茅っ原で、その男たちと出あった。男たちというのは、私が京都の相国寺塔頭の小僧だった頃、本山宗務所から今宮の大徳寺よこにあった般若林中学へ通っていた上級生の滝谷節宗と、もう一人はその時しか見ていない中学生だった。滝谷のずんぐり肉のもりあがった肩と、短かい首の上に耳のひろがったのっぺり顔が、茅の波間から出てきた時、こんな所でこの男に逢うのはどういうことか、と先ず疑り、間違いなく滝谷節宗だとわかると、滝谷はこの山の東麓から北へつき出た小さな岬の音海村の海泉寺の長男だったな、と忘れていたことが思いだされた。確か私が一年に入った時、滝谷は五年生で、ふつうだったら卒業していなければならない年齢なのに、六年目の在

学だった。宗務所でも、校内でも、落第の大将といわれていた。私が二年になった時も、やっぱり卒業できないでいた。結局卒業できないまま本山で掃除をしたり、祝聖といって、一日、十五日には塔頭の僧が集まって、法堂で催される、天皇の息災を祈願する行事の維那役（経の先唱僧）をやったりしていた。そのうち見なくなったと思ったら、在所の寺へ戻っていたのか。まるきり自分と関係がないときめて、忘れてしまっていた同窓生で、それがひょんな所で出あったがために、何やかや、かかわりがないと思われていたことが、一気に思いだされてくる、そんな邂逅がよくあるものだ。

滝谷は、白衣の上に甚平のような黒衣を着、袖まくりして首の汗をふきながら、ようやく私の顔を思いだせたといった眼で、わらった。三十そこそこだったろう。私はその年二十五だったから。

「高野の分教場におるのんか。こらまた縁やなァ。わしゃなーんも知らなんだ。あんた、あれから瑞春を出て、それからここかいな」

歯ぐきの出る口を大きくあけてわらった。瑞春は私のいた塔頭寺の名である。正しくは瑞春院といった。滝谷がいなくなってから、私はこの寺を逃走、のち衣笠山の等持院にゆき、そこで、般若林中学から花園中学にうつり、卒業と同時にまた寺を逃走して還俗した。どんなふうに、しゃべったかわすれたが、暑い陽ざかりだし、木かげをさがすにもない茅っ原である。早口でお互いがしゃべりあった。滝谷はいった。

「親爺が死んで、いま音海へもどって住職させてもろとる」

させてもろとるという言い方に、中学を出もせずにといった自嘲が出ていた。そんなことをいっても意地も張りもないという眼になっていた。そういってうしろの中学生をふりかえる。中学生は、私たちの話を興味ぶかげにきいていたが、時々眼は海の方へむけていた。

「知っとるか。あんたにも縁がある子や。金閣寺にいよる。成生の西徳寺のぼんで、いま花園の四年や。昨日、和尚の法事をつとめにもどって、西徳寺で会うた。わしも今日は関屋の村葬にゆくんで一しょにほんなら青郷へ出よかいうて……」

中学生を、私は見すえた。金閣寺の小僧。縁は多少どころでなかった。瑞春院の先住和尚が金閣寺へ栄転して住職になった。成生の裏の野原部落からきていた小僧も和尚についていって金閣の小僧になった。その金閣寺へ、また小僧が、しかも成生から。成生に西徳寺という寺があったのか。まったく、私にとって、意外な思いがしたので、国防色の制服の第一ボタンをはずして学帽をやや阿弥陀にかぶり、よくみれば中学四年らしくなく少年じみてみえる学生を見守った。と、学生は私から視線をそらせた。滝谷と私の話に、瑞春や花園の名が出ても、無関心といいたげなのが私には不満に思えた。そこで、金閣寺和尚は相国寺塔頭から赴任したはずとか、その時いっしょについていった浜田弘は、私の法兄で、成生のうらの野原の出身だ。弘さんは元気か。滝谷へとも、その若者へともなくきいた。

「弘さんは戦死したがいね」

と滝谷がいった。うしろから、中学生が、

「き、き、き、金閣は先住さんが死なはって、もうし、し、し、新命さんが長老はんです」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

どもりながらいった。私は二どびっくりした。極端な吃音だった。き、き、きと首の血管がふくれるほど息張った。浜田弘が戦死した。瑞春からいった老僧も死んだ。それでは、もう金閣寺には、私と懇ろだった人はいなくなる。

「新命さんは天竜にいた海さんですか」

「そや、海さんや」

と滝谷がいった。中学生もうしろでうなずいた。滝谷はいう。

「浜田はんも、生きとれば、えらぶつになれたが、あたら死んでしもて……」

「いつのことですか」

「一昨年の八月に村葬やった。野原の松源寺に眠ってござる。その縁で、この子は金閣へゆくことになってのう」

中学生が、寡黙にこっちをにらむように見ている理由がわかった。あんたはすると、新しい和尚の弟子か、と私はきいた。

「は、は、はい、そうです」

と中学生はこたえた。帽子の阿弥陀からのぞいた額ぎわはへんにせまく、くちびるのあついところと、眼尻のつりあがった感じがかすかな圧迫感をつきつける。辺境部落から、京都の金閣へ入った気構えのようなものも出ている。少年とも青年ともいいがたい陽焼け顔は、私の眼をひきつけた。私はそれから、中学生の硬い表情をほぐすべく、海さんは、天竜僧堂にいたころ私といっしょに松竹映画の下加茂撮影所で催された、野村芳亭の京都葬に出席し

たはずで、その時、撮影所のカメラマンがとったスナップ写真に、林長二郎や飯塚敏子が一しょにうつっていて、私はそれだけはいまだにもっている、などといった。中学生はおもしろげにきき、何かいいたそうにして吃ったままで私を見ていた。

それぐらいのことだ。滝谷とは分教場の内容など話したはずだが、あとのことはわすれた。ふたりとは二十分くらいで別れた。

私が歩いてきた松尾寺参道から今寺へぬけ、それからふたりは分教場わきの坂を降りて青郷駅へゆくのだった。関屋は駅に近い部落で、戦死者の遺骨が村へまた帰ったか。滝谷は経をよみに、金閣寺の小僧は汽車で京へ去る。滝谷の首が左右にゆれて茅にかくれ、そのあとを、中学生が、風呂敷包みをわきへせりあげ、寸のつまったズボンにゲートルをまいた、やや胴長なうしろ姿で消えた。

この中学生がまさか、六年後に金閣へ放火して世間を騒がせようなど誰が思えただろう。

3

金閣が焼けた時、浦和市白幡町の農家の土蔵を借りて住んでいた。のちに別れた妻が神田のダンスホールへ通う留守を、四歳だった長女を守りしながらのぐうたら生活だった。浦和でも号外が出た。藁半紙の半切ぐらいの大きさで、「国宝金閣焼ける」と大見出しがあり、〝放火容疑者は同寺徒弟の大学生〟と副見出しだった。鈴を鳴らしてきた配達少年から買っ

て、短かい文章をむさぼるように読んだ。毎日新聞であった。なぜ、そんなことをおぼえているかといえば、文章に小さい誤りがあった。「今暁午前三時〇五分京都市北山金閣寺町鹿苑寺（通称金閣寺、住職村上慈宗氏）にあった国宝金閣が炎上した」このリード文の、住職村上慈宗とあるのは誤りだった。慈宗でなく、慈海で、私の親しんだ海さんは僧堂時代の呼名、のちになって慈海和尚あるいは、慈海長老とよばれた。住職の名をまちがえるほどだから、あてにならないものだな、という新聞への感想は、その号外からである。だが夕刊がきてわかった。午前三時〇五分に炎上した金閣は徒弟林養賢によって放火されていた。私は絶句した。六年前高野分教場にいたころ、青葉山うらで逢った中学生がやったのだ。帽子を阿弥陀にかぶった額ぎわのせまい男。私と滝谷の会話に聞き入っていた吃音少年だ。あの男が火をつけたか。

いま手っ取り早く当時の記事を総括してみると次のようになる。

昭和二十五年七月二日の午前三時ちょっと前ごろ金閣から火が出た。深夜だったので、寺にいた住職、徒弟（五人）、従業員（五人）は寝入っていて、火が出たのに気づかず、（あとでわかったことに、火災報知器が故障したままだった）小僧の一人がとび起きたのは三時〇五分。金閣の窓という窓から炎の舌が勢いよく空へ帯でも放りあげるみたいに燃え猛っていた。住職を先頭に鏡湖池（金閣のある周りの池のこと）の岸に立った者はなすすべもなく、ただ燃える金閣を見ていた。この火は、上消防署の望楼監視員に発見されていて、同寺から報告があったのより早く、市内七消防署から、各一台ずつ消防車がきたが、車は総門をくぐれても、

庭園内の金閣のことだし、池のはたの道も車の通る幅はない。別の門はあっても、車は梯子を積んでいたから、近くへ寄れなかった。で、消防隊はホースを精一杯のばして、池から汲みあげ、水をかけたころは、殆んど燃えてしまっていた。寺側もふくめ、消火作業は、あまりなされなかった。おくればせの水は、金閣が黒い虫かごみたいな姿になったころに間にあっている。写真にも出ていて、私は金閣寺へよく行ったから地形上のことも焼ける様子も想像できた。

火元を調べていた警察官と、消防署員に、行方不明の林養賢のことが報らされた。徒弟の失踪は不審を抱かせた。中心になった警官は若木松一警部見習であった。林の部屋は庫裡と隠寮のあいだの廊下のわきにある北向きの四畳半。調べるとふとん、蚊帳、机、本箱がなく、押入れから衣類を入れた柳行李も消えていた。前後して、焼け跡を調査した署員が、落ちた床の下の中央部、足利義満の木像のあったあたりから、ふとん地の滓、真鍮の蚊帳のつり手を発見した。林の所持品にまちがいないことがわかった。失踪者は放火容疑者となり、検察側は京都地方裁判所から逮捕状をとって、九時頃に指名手配となった。寺内にいないから、市中ならびに附近の山の探索が行なわれた。午後四時ごろだ。庭つづきにせりあがっている山、通称左大文字山の盆行事に火を焚くあたりで林がうずくまっていた。寺内の清掃係の男が警官にしらせ、若木が二人の配下をつれて急行、林だな、といった時、林は意識朦朧だった。わきに小さいヤカンとカルモチン百錠入りの空箱があった。左胸の前部を、約三センチのふかさで切っていて、シャツにもズボンにも血がついていた。自殺をはかったらしいが、

死にきれないで、そこにうずくまっていたことがわかった。林は従順に警官に従い、すぐ放火をみとめた。金閣寺へ連行された後、西陣署へおくられた。

署へゆくと、林はとりとめのないことを云った。放火動機について、ただ世間を騒がしたかったとか、社会への復讐のためだとかいっていた。前田幸之助検事が、新聞記者に発表した報告は、取りみだした林の様子をよく表現している。「動機については宗教上か思想上その他に何か深い事情があるらしく、本人もしきりに何か述べたがっている様子をしているが、二、三日たって意識が回復してから詳しい取調べを行う」といっていた。寺側の報告は村上住職であった。住職は先ず世間をさわがせたことを詫び、国宝の焼失を遺憾とし、林について、じつは一面識もない田舎の小寺の子を養育してきたが、吃音の障害もあって日ごろから鬱性がみえ、学業もおろそかにするので、一週間前に叱責したところ、本人は悔いあらためてくれた。焼けた当夜は、自分に灸をすえ、按摩してから自室へ退いているほどだし、計画的な放火だとは全く信じられない。驚いている、といった内容である。

ある新聞は、林が一年前ごろから遊廓（五番町）に出入りし、出水通千本西入ルの泉楼の部屋輝子と交わっていたとつたえ、また当夜同寺へ来合わせていた福井県大飯郡和田村車持正法寺住職の江上大量が、病気で帰省させていた息子（金閣寺の徒弟）が快くなったので、再び入山させる目的で同寺を訪れ、一泊するのを機に、林と碁を三番打ち、午前一時ごろ江上は林を最後にみた立場から、彼の挙動に放火を計画していたようなところは微塵もうかがえなかった、といった。

ここで気になったのは、新聞が林の生誕地を「福井県」あるいは「若狭」と報道していることだった。林の生誕地は舞鶴市字成生だから丹後、「京都府」である。どうして、また、こんなまちがいを書いたか。あとで、こんなこともふかく考えさせられるようになるのだが、よこ道にそれるので云わずにおく。

新聞の一字一字は私を極度に興奮させ、緊張させ、考えさせた。浦和にいるのがもどかしかった。京都にいたら、野次馬に加わって、焼け跡へ飛んでいたろう。

犯人の林とは、六年前に会っているのだ。また焼けた金閣は、少年時にいた相国寺派だ。瑞春院は法類、法事や行事があるたびよく行った。村上住職が一面識もない人の子を徒弟にしたといっているが、事実はそうとしても、しかし、成生岬の浜田弘の村葬に出かけた縁だときいていた。野原の松源寺に眠った弘の霊の橋わたしだろう。それがなければ、林養賢は金閣へ入る縁をつかめていない。弘は私の兄弟子、般若林を卒えると現役志願して将校になり、フィリッピンで戦死している。

こんなことを思いつづけながら、浦和駅へ子をつれて新聞買いに通っていた私は、三日目に、もう一つの衝撃的な記事に息をつめた。林養賢の母の死だった。

七月三日、養賢は西陣署にいた。母の林志満子が、当時仮寓していた京都府大江山麓の尾藤部落から、実弟の勝之助に伴われ、西陣署へ面会にゆき、養賢が会見を拒否したので、失望のあげく帰村する途次、山陰線保津峡駅をすぎた汽車が断崖にさしかかったところ、車輛の連結点から、川へ投身した。死体は岩石にあたって、頭と顔をくだいた即死だった。子の

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com